

- 宮崎県では、平成22年にマンゴーに次ぐ熱帯果樹の導入を検討する研究会を発足。その後、**平成29年に「ライチ研究会」**として再編。県全体でのライチの産地化を目指す、当研究会の活動を支援。
- 果樹担当専技を中心に、関係機関で役割分担をしながら、栽培技術の確立に重点的に取り組むとともに、普及指導員の技術力向上に取り組んだ。
- その結果、ライチ研究会の令和3年産の**栽培面積は3.2ha(未結果園を含む)、出荷量6.5t、販売金額3,700万円まで増加。**

具体的な成果

1 栽培技術の向上

- 実証ほ成果の活用や試験研究との連携により栽培技術が向上
- ① 花芽確保技術の確立
- ② 主要品種の裂果と結果負担との関係性の解明
- ③ 農薬の登録拡大 1剤

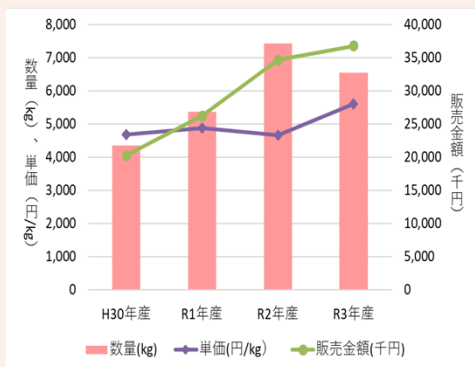
2 ライチ出荷実績の増加

- 新規産地が育成されつつあり、栽培面積や出荷量、販売額が増加(H30→R3)

- ① 栽培面積 2.8ha → 3.2ha
- ② **出荷量 4.3t → 6.5t**

- ③ 販売単価 4,700円/kg → 5,600円/kg

- ④ **販売額 2,000万円 → 3,700万円**



3 研究会会員の生産意欲向上、普及指導員の技術力向上

- 定期的な研究会活動や講習会により、会員の栽培管理技術や生産意欲が向上
- 会員数 19名 → 23名 (H30→R3)**
- 技術員向け研修会等により、普及指導員、営農指導員の技術力が向上し、地域での園地巡回や指導が活発に。

普及指導員の活動

1 ライチ研究会の支援

- ライチ研究会の支援のため、**関係機関と役割分担を明確化。**
- 講習会では、**会員からの情報発信や会員相互の意見交換を促す。**

2 栽培技術の確立

- **果樹担当専門技術員を中心に、各関係機関と連携。収量安定を目指すため問題点を整理。**(着花不良、結果不良、裂果)
- 技術的な仮説を立て、**各地域における実証ほの設置を推進。早期解決のため、試験研究と同時並行で実施。**

3 技術員向け研修会の開催(H29～継続)

- **年2回程度、普及指導員、営農指導員を対象とした研修会を開催。**
- ライチの基礎的な生理生態、技術的な課題を整理し、今後の取組方針を検討。

4 調査研究を活用した県統一版栽培資料作成(R1～継続)

- **共同の調査研究テーマを設定し活動**(園地調査票、必須管理チラシ、時期別の栽培管理資料を作成)。

普及指導員だからできたこと

- ・ 会員の主体的な活動を促し、JAグループ、県(行政、試験研究、普及)を結びつけ、調査研究を活用しながら栽培技術の確立と安定生産を目的に活動を展開したことで、**県域での産地化につながった。**

マンゴーに続け！新たな熱帯果樹 ライチの産地育成

活動期間：平成 29 年度～継続

1. 取組の背景

県では、マンゴーに次ぐ熱帯果樹の導入を検討するため、平成 22 年に「ライチ・インドナツメ研究会」を発足（ライチ栽培者 8 名）し、現地適応性試験を開始するとともに、産地化に向けた取組に着手した。その後、インドナツメの栽培は困難であると判断し、平成 29 年に「ライチ研究会」となり、令和 3 年度現在、会員 23 名、栽培面積は約 3.2ha まで増加している。研究会では、会員、JA グループ、県（行政、試験研究、普及）が一体となって、栽培技術の確立と安定生産を目的に活動を展開してきた。

2. 活動内容（詳細）

（1）ライチ研究会の支援体制

県全体でのライチの産地化を目指し、県域のライチ研究会の支援に努めた。栽培技術の確立については、果樹担当専門技術員（以下「専技」）を中心に、JA、農業改良普及センター、総合農業試験場亜熱帯作物支場で役割分担をしながら取組を進めた。



写真1 ライチ研究会の現地講習会

（2）栽培技術の確立

ライチ栽培では収量の安定が大きな課題であり、問題点である着花不良、結果不良、裂果の発生を解決するために、技術的な仮説を立て、各地域における実証ほの設置を推進した。その際、実証ほの計画をライチ研究会に提案し、会員と試験内容を検討するとともに、試験場とも連携を図り、試験研究と現地実証を同時に進めることで、早期の課題解決を図った。



写真2 講習会における秋芽処理の実演

(3) ライチ研究会活動支援

ライチ研究会の講習会では、専技の栽培管理の講習に加えて、ベテラン農家を優良事例として、栽培管理の方法や工夫している点を紹介してもらうなど、会員からの情報発信や提案、会員相互の意見交換を促すように努めた。

(4) 普及指導員、営農指導員向け研修会の開催

平成 29 年から年 2 回程度、普及指導員、営農指導員を対象とした指導力向上研修を開催し、ライチの基礎的な生理生態を学ぶとともに、技術的な課題を整理しながら、参加者全員で今後の取組を検討するようにした。

(5) 調査研究活動を活用した取組

令和元年から、ライチをテーマにした共同の調査研究に取り組み、県下統一版の園地調査票様式、3 つの必須管理チラシ、時期別の栽培管理資料を作成した。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 栽培技術の向上

実証ほや試験研究の成果として、花芽を確保するための秋芽除去の時期と方法、主要品種「チャカパット」の裂果と結果負担との関係性の解明、現地試験を実施した農薬 1 剤が令和 3 年に登録拡大されるなど、栽培技術の向上につながった。

(2) 会員の意欲向上

ライチ研究会の一連の活動と、会員の必須管理の徹底により、着花と結果率が向上しており、研究会の目標である反収 1 t を達成した農家も出るなど、会員の栽培意欲が高まっている。

(3) 営農指導員、普及指導員の技術力向上

技術員向け研修会を継続的に開催することで、現在では栽培や指導に関する活発な意見交換、地域の課題に応じた実証ほの提案、地域での新規栽培者への園地巡回が積極的に行われようになり、営農指導員、普及指導員の技術力の向上が図られた。

(4) ライチ研究会の販売実績

ライチ研究会の令和 3 年産の販売実績（J A 宮崎経済連取扱実績）は、数量 6.5 t、単価 5,615 円/kg、販売金額は過去最高の約 3,700 万円となった（図 1）。今後、未結果樹や幼木が順調に生育することで、さらなる出荷量の増加が見込まれる。

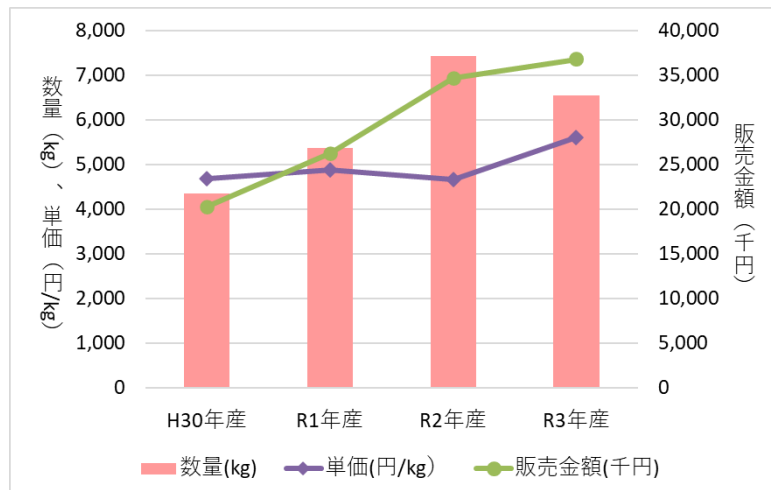


図1 ライチ研究会の近年の販売実績

4. 農家からの評価・コメント

(ライチ研究会会長・綾町・大隈圭造氏)

これまでの各関係機関の熱心で適宜的確なアドバイスにより、従来に増して農家の栽培技術が改善されてきています。

昨今の異常気象への対応など様々な課題はありますが、ライチ研究会員が一丸となり、県、JAとの連携を図りつつ、課題解決を図っていきたいと思っています。

5. 普及指導員のコメント

(児湯農林振興局農業経営課・主任技師・迫田剛行氏)

栽培技術が未確立かつ事例の少ないライチにおいて、県域での優良事例や失敗事例、展示ほ等を、多くの生産者や技術員で共有し検討できたことが早期の技術確立や技術員の指導力向上につながったと感じています。

児湯管内においても、この取組で構築された知見によって適正な技術支援が可能となっています。ライチ生産者の所得向上や産地化が進み、より経営しやすい環境に発展するために、今後も必要な取組であると感じています。

6. 現状・今後の展開等

ライチの産地化はまだ道半ばであるが、今後はブランド化も視野に入れながら、更なる栽培技術の確立と農家所得の向上を目指し、会員と関係機関が一丸となって活動を進めていく。